

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「インド・大菩提寺物語」⑦

ブッダが悟った聖地ブッ・ガヤーの大菩提寺（マハーボディー寺）について語ってきた。ある読者から電話があり、いつも頭を抱えながら読んでいたが、今回の旗のエッセイはすうーと読めた、というコメントを頂いた。インド語の固有名詞、仏教用語、悟り体験の解説などは身近ではないので、それだけで読みづらかったであろう。頭を抱えながらも読んでいただいただけでも感謝である。

読者はバリバリの右翼だというので、おそらく国旗について共感されたのであろう。

前述のように、わが輩の若き時代はベトナム戦争などの反戦的な流れがあった。それは反体制的なものに結びついて、国歌や国旗に拒否感があった。

「ところが、インド人から国歌を歌ってくれといわれて戸惑った。日本領事館に掲げてある日の丸をみて感動し安心したことがある。政府から強制されなくても、わが輩も日本人であることをインドで自覚した」

インドで友人から国歌を斉唱してくれと乞われた。国歌を斉唱しない、国歌を知らないといえば、バカにされる。それで何とか歌ったが、全く反応がなかった。インドの国歌（ジャナ・ガナ・マナ/人々の意志）に比べて、リズム感や高揚感がなかったからであろう。

インド国歌で、わが輩が高揚を感じる一節を次に記しておく。

「ジャナ ガナ マンガラ ダーヤカ ジャヤヘ バーラタ バグギヤビダータ・ジャヤヘ ジャヤヘ ジャヤヘ ジャヤ ジャヤ ジャヤ ジャヤヘ」

(彼らは汝の祝福を求め祈り、汝の喜びを歌う、人々すべての庇護は汝の手中にあり、インドの運命の裁定者、勝利を、勝利を、汝に勝利を)

わが輩の熱烈なる読者（54歳）からもコメントを頂いたので紹介しておく。

「私が学生の時は国旗掲揚に起立することに全く違和感がなかったのですが、今は教員が率先して立たなくなりました。海外で、日本大使館などで日の丸を見るとほっとしました。よく、館内で日本の新聞を見せてもらいました。中には旅行者には見せてくれないところもありました。何と言っても、昨年もそうですが、オリンピックで日の丸、君が代が流れると胸にじんときてくるものがあります。外国では、自国国旗を燃やしたり、踏みつけたら、不敬罪で捕まるところもあります。日本人ももっと自国に誇りを持ってほしいものです」

若いころから各国を巡った旅人のごもったもなコメントである。

ところが、御両人も「仏旗」の由来について全く知らなかった。いや、旗そのものすら知らなかった。国旗国歌には、それぞれの国家体制や歴史の背景が反映されている。

仏旗は、ブッダの身体から発せられた五色（青、黄、赤、白、オレンジ）がもとになっている。これは身体（外的）というより、深い瞑想状態で内奥から発せられた五色である。したがって、国家体制や国家理念を象徴する国旗とは、根本的に異なるものである。

仏旗は、普遍的な「完全自由、平等」を謳うものである。相対的な“仏教ゲンリ主義”とは相容れない。

さて、この大菩提寺に「仏教徒の、仏教徒による、仏教徒のための大菩提寺」という旗がたなびき、シュプレヒコールがこだますれば、ブッダは喜ばれたであろうか。

篠原さんという医師が不治の病に罹り、1995年インドへ「最期の旅」に出立した。（「若き医師、篠原さんの海」）そしてブッダ・ガヤー大菩提寺に参拝した。その門前に櫓が設営され、インド人僧たちがパーリー語の経をあげていた。篠原さんは櫓に上がり、そのリズムの中で静かに瞑想していた。ところが、読経がおわると僧たちが突然拳を振り上げながら、シュプレヒコールを繰り返した。訳は分からないが「こりゃ、変だ」と思い、壇上から飛びおりて、啞然と僧たちを見上げた。事情の分からぬ篠原医師にとって、これは「謎」として記憶に残った。

この「謎」を解くために、なんの為のシュプレヒコールか。大菩提寺は誰のものか。インド人のものか、スリランカ人のものか、チベット人のものか、はたまたミャンマーあるいはタイ人のものか。そもそも、「仏教徒とはなに者」なのか、などなどを考えてみたい。

まず、なに故に平穏であるべき大菩提寺にシュプレヒコールがこだましているのか、説明しておかねばならない。次号で歴史的に概観してみるが、その前に読者諸氏に、考えるためのヒントを提示しておきたい。

「鎌倉時代に戦禍を恐れて館を放棄した武家集団があった。その館は廃墟となり周辺の武家農民が土地を開墾して住んでいた。まがりなりにも廃墟を維持していた。明治時代（約六百年後）に、その子孫が館跡にやって来て、この館は我らのものだから返せ！」

と主張したら、裁判官たる読者諸氏はどのように裁くのだろうか。これを念頭において、次号を読んでいただきたい。